

魅

力人

みりよくびと

Masanori Kono

東北で唯一のJRA競馬場「福島競馬場」が今年、開設100周年を迎えます。芝2kmを駿馬が駆け抜ける重賞競走「七夕賞」で知られる福島競馬場と共に歩んできたのが、福島市桜木町の「河野テラー」です。震災以降、中央競馬に加え地方競馬の勝負服も手掛けるようになったという3代目・河野正典さんを訪ねて、福島競馬場と共に歩んできた100年とこれからを伺いました。



一寸の迷いもなく裁断する正典さん。3代にわたり使われ続けてきた道具が並ぶ仕事場では、女性スタッフ2人と正典さんで勝負服、調教師のジャンパーなど、月70〜80点を仕上げます



染めも縫製もオール福島 職人技が光る勝負服で 福島競馬を支え続ける

1人で1着仕上げる職人魂
今も頑なに守る職人魂
騎手がレース時に着用する服を勝負服と言います。デイトインパクトなどを所有する馬主の勝負服やJRA 16年ぶりの女性騎手である藤田菜七子騎手が福島競馬場で中央競馬初勝利を挙げた時の馬主の勝負服など、数多く手掛けてきた「河野テラー」は、今年で創業94年。馬主の顔ともいえる勝負服を手掛けるようになってしたのは、昭和20年頃からのことだと言います。きっかけを正典さんに尋ねると「福島競馬場が目と鼻の先という場所に店があり、乗馬ズボンだけでなく勝負服も作れないかと言われたのがきっかけだったと聞いています」と話してくださいました。「近くに織物が盛んな川俣町があり、うちの向かいには染物店。オール福島で勝負服が作れるというので、勝負服の受注生産が主流になったようです」。



震災の後、1年間の試行錯誤を経て開発し、4年ほど前から作っているプリントの勝負服（写真右）。模様を縫い付ける従来の勝負服（写真左）より約200g軽く、体重制限に苦しむ騎手への朗報となりました

合資会社 河野テラー代表取締役
このの まさのり
河野 正典 さん
昭和47年、宮城県仙台市生まれ。大正13年、「河野テラー」を立ち上げた祖父・故正太郎の4人の子どもの末っ子を父に持つ。平成11年に正太郎の娘婿で2代目の故政平に弟子入り。平成18年、代表取締役就任。祖父から伯父へと受け継がれてきた伝統を守りながら果敢に技術革新にも挑むチャレンジャー。

2代目・故政平さんは元騎手で、武豊騎手の要望に応えた、伸縮自在で空気抵抗の少ない素材「エアロフォーム」の開発者です。厳しい2代目の下で修業した正典さんは、「勝負服は職人1人で1着を仕上げる」という河野テラーの伝統を今も忠実に守っています。複数の手が入ると縁起が悪いといわれる勝負服。職人の一途な思いが、僅差のレースの明暗を分ける一助になるかもしれないと思うと気が抜けないと言います。「そうした背景があるので、うちの勝負服で出走した騎手と馬が勝った時は、本当にうれいすね」。

大震災の苦勞をバネに奮闘 プリントの勝負服を開発

27歳から勝負服づくり一筋の正典さん。東日本大震災の時は、これ以上ないと思うような不安と苦しみを抱えました。「福島競馬は中止。注文は激減。そんな時に手を差し伸べてくれたのがそれまであまり縁がなかった地方競馬の騎手の皆さんでした」。出掛けて行って状況を話すと言意の輪は瞬く間に広がり、関西からも注文が舞い込むようになりました。自分でも驚くほどアイデアが生まれ、メシコや既舎スタッフを着るジャンパーなどを勝負服と同じ生地、同じ色で作るとこれが評判に。辛い思いをしたからこそ、人とのつながり、人の

温かさを感じたと振り返ります。

震災を機に、より一層人とのつながりを大事にするようになった正典さんは、お客さんの声にも耳を傾けます。「体重制限で苦しむ騎手を少しでも楽に」という声から生まれたのが、柄を縫い付けるのではなくプリントした勝負服。労苦を共にしてきた染物店の協力を得て、生地の薄さと色にこだわり1年がかりで開発し、とても喜ばれました。

「100年経っても変えたくないものは変えない。動くものは動かしていく」。伝統と革新を両輪に、福島競馬の縁の下の力持ちで有り続けたいと話す正典さん。今年で福島競馬場は開設100周年。これからも共に歩んで行ってほしいですね。

勝負服の種類



勝負服に使える色は全13色。色の明度、彩度も厳しく指定されています。模様は輪、一文字、帯などの指定があり、胴と袖に入れられる柄は1種類。他にも細かな規定があります



馬の覆面「メンコ」